

# 美術は決して特別なモノではない

## 大分は県全体が美術館・博物館だ

OPAM教育普及グループでは、専門スタッフ3名で開館約1年前から準備をスタートした。日常の中の美術と美術館。それを考えるために、まずは県内を端から端まで見渡してみることに始めた。すると山に行けば行くほど、海に行けば行くほど、公共交通機関は整っていないし、市内のど真ん中に建つ県立美術館に行くには、なかなか行きづらい地域もいっぱいだと思った。美術館に行けないのなら、こちらから出向く。この発想が「アウトリーチ」の活動につながった。これは準備室時代からすぐに取り掛かり、現在まで続いている。そこで行っているのは、主に美術体験。作品を描く、つくる、そして美術作品を見ることだけではなく、身の回りからきれいだと思えるモノを見つけること、身体表現、さらに目をつむる・耳を澄ますなどの五感を意識することなど。美術とはとても幅が広くて面白そうなものだと興味を持ち、やがて大人になってから美術館に足を運ぶことにつながればと思っての活動だ。準備室時代にはその数29か所、参加者人数延べ1423名。今後でもできる限り、地域を訪れることは続けていきたいと思っている。

また地域へ行くたびに感じたのが、ここには美術館はないけれども、いたる所に美術はいっぱいあるということ。大分は県全体が美術館・博物館といえるような魅力にあふれている。こうした身のまわりに在る美に着目し、「オリジナル教材ボックス」の制作を開始した。大分に住んでいても、知っているようで知らない大分が意外とあるに違いない。そう考え、県内各地でアウトリーチを行うかわら、ふるさとの魅力再発見を美術的視点で行い、石や植物、貝殻など、好奇心を触発する“美のカケラ”を集めていった。

## 県内じゅうを歩き回って、教材ボックスを制作

山あり、谷あり、川あり、海ありの大分県はとにかく広い。中でも地質学的に大分県は特別な地域で、足元に落ちている石ころは色がとても豊富なことをご存じだろうか。理学博士の野田雅之氏からこのことを教わった我々は、行く先々で石を拾い集め、独自の積み木ならぬ積み石にしている。これはバランスをとるのが難しいが、積むと不思議な形ができるので思わず集中してしまう。また顔料作り。石を砕き、粉にして、絵の具のもとになる顔料をつくる。これら大分県の石ころや鉱物の専門的な話を野田氏から伺い、多くのアドバイスをいただいている。氏によると、地質的に特異な場所は四浦半島に集中しているという。日曜日に何度か案内していただいた。ヘルメットに作業着と安全靴。とても88歳(2014年当時)という年齢には見えないいでたちで、ハンマー片手にガンガン歩く。さすがにここは無理では!?と思うような断崖絶壁を降りたこともあった。湾曲している地層や砂浜により異なる石の色、自然の中にある造形美に心を奪われた。

その後、我々スタッフだけで辰砂を探して丹川を歩き回ったり、宇目の観音滝でヒルに血を吸われたことも今ではいい思い出だ。他にもヒメコウゾを探して日本茜を偶然見つけたり、紫根やサフラン栽培の現場、津久見石灰採石場なども訪問することができた。

こうした教材ボックス制作に伴うフィールドワークは、ワークショップやレクチャーの美術体験プログラムにもつながっていく。地学や植物学、そして民俗学の先生や左官の親方など、通常では美術の分野に入れないさまざまな分野の専門家との出会いがあり、そんな方々から教わったことは、美術的視点で捉えると、一般の人びとが大いに楽しめる内容であると確信した。開館後に美術館で行うプログラムを企画準備していくとともに、情報コーナーに常設する書籍に関しても、教材ボックスや今後のワークショップ、レクチャーを想定しつつ、図鑑や絵本を多くそろえていきたいと準備した。

## 全力で突っ走った開館後の1年

開館すぐのゴールデンウィークには、「モノと写真が語るこれからの教育普及」と題した展覧会を開催した。準備室時代に訪れた小学校の生徒たちの作品を記録写真と共に展示したほか、教材ボックスのお披露目、そしてこれからワークショップをはじめとした講座で使用する道具や素材を展示し、今後の教育普及活動を暗示させる内容となった。連日多くの人たちが訪れ、美のカケラがぎっしり詰まった教材ボックスやアトリエの展示に感嘆の声があがった。

ゴールデンウィークが明けるとすぐ、県内全小学生招待事業「ファーストミュージアム」がスタート。県内の小学生6万人、1日平均1350人が連日やって来た。正直ヘトヘトになったが、大分県じゅうの小学生と顔見知りになり、街を歩くと子供たちから指さされるのがうれしくもあった。

毎週末には、美術に親むさまざまな内容のワークショップやレクチャーをすべて自分たちで企画し、実施している。また長期の休みや祝日、連休には、通常より長い時間のコースや企画展の作家を招いての特別ワークショップも開催。予想以上に多くの人びとに参加していただき、教育普及スタッフも全力投球の日々だった。OPAM来館者は2015年春の開館以来、60万人を突破。ワークショップ&レクチャーは2016年2月末までに235コース開催し、参加者数は延べ5,917人となった。

美術は決して難しいモノではない。美術館もそうだ。そう感じてもらえるようにと数々のワークショップ&レクチャーを開催し、がむしゃらに突っ走ったこの1年。あらためて活動を振り返るとともに、美術とはなにか、美術館とはどんなところかを確認していきたい。

(榎本寿紀)



モノと写真が語るこれからの教育普及